

地域と共存した資源循環型大規模畜産への挑戦

～「三方良し」(消費者・生産者・地域社会)の商人道精神に根ざして～



有限会社 金子ファーム
(かねこふあーむ)
青森県上北郡七戸町

推薦理由

(有)金子ファーム(代表 金子春雄氏、58歳)は、青森県の畜産地帯である七戸町で約130haの広大な用地を有し、ホルタイン種、交雑種、日本短角種を約8300頭飼養する、年間の売上高が約24億円の県下の大規模肥育農場である。

持ち前の優れた経営感覚と努力で幾多の困難を乗り越え、現在までに成長するに至った同社であるが、ただ利益を追求することが目的ではなく、その経営の根底に流れる理念は、創業以来一貫して「安全・安心にこだわった消費者から信頼される畜産物の提供」である。また、近隣の六ヶ所村出身の金子氏は、地域社会に密着した経営の実践として「環境保全への配慮」「資源循環型畜産への挑戦」そして「地域社会との強調・融和」への取り組みに尽力しており、その姿勢は称賛に値するものである。

当事例で高く評価されたポイントは、次の通りである。

1 安全・安心へのこだわり

安全・安心にこだわり、効率よりも安全性を重視し消費者から信頼される畜産物の提供を実践するため、給与飼料は自社生産のデントコーンサイレージや抗生物質を一切入れない自社ブレンドの配合飼料と県産稲わらなどの粗飼料で肥育し、トレーサビリティシステムもいち早く導入するなど、安全性の確保に取り組む姿勢は他の模範となるものであり高く評価されるものである。

特に、今や同社の看板商品となっているホルスタイン種の自社ブランド「健・育・牛」については、「健康ですくすく育つこと＝安全・安心につながる」をコンセプトに、素牛の

導入からこだわり、信頼できる契約農家からの導入を徹底している。

このように安全・安心に徹底的にこだわった「健・育・牛」は、大手メーカーの厳しい条件をクリアし評価も高く、取引の更なる増頭も要請されている。

2 環境保全への配慮

地域社会に密着した経営の実践として、これまでに最新のふん尿処理施設を積極的に設置するなど、環境保全に積極的に取り組んでいる。

環境保全への配慮とともに、生産した完熟たい肥は、(社)青森県畜産協会が主催する青森堆きゅう肥品評会で優秀賞を受賞するなど品質の高さが認められ、県内各地域の野菜農家や果樹農家から注文が殺到し、地域農業の振興および青森県が進める「日本一健康な土づくり運動」にも大いに貢献している。

3 資源循環型畜産への挑戦

平成 18 年に用地を購入した七戸町内の競走馬牧場内のほ場に自家生産した堆肥を投入し、「牛ふん→土づくり→デントコーン・菜種栽培(油の搾りかす)→牛用飼料」といった徹底した資源循環型畜産の構築を図っている。

今後は、菜種廃食油や食品加工業者の廃食油を回収しバイオディーゼル燃料を作り、農耕用機械に活用するなど、更なる資源循環型畜産を構築すべく資材等を整備中であり、資源循環の課題に取り組む姿勢は他の模範として高く評価される。

4 地域社会との強調・融和

金子氏は、何よりも地域社会との協調・融和を重視し、県の営農大学校の学生を研修生として受け入れなど後継者の育成にも尽力している。

平成 18 年に購入し受け継いだ競走馬生産牧場内には、現存する最古のきゅう舎といわれる南部曲家育成厩舎や馬頭観音堂など「登録有形文化財」に指定された貴重な歴史的建造物が 8 ヶ所あり、これら文化財を自費で整備・管理するとともに町民に憩いの場を提供しているほか、毎年近隣住民を招いての例大祭、フェスティバルの開催など地域社会との協調・融和に尽力している姿勢は称賛に値するものである。

一方、金子氏は、(社)青森県配合飼料価格安定基金協会の副会長の要職にあり、飼料価格高騰の渦中にある多難な協会の円滑な運営に尽力し、本県畜産の振興にも貢献している。

以上、評価されたポイントを述べたが、金子氏は農業者ではあるものの、「消費者、生産者である法人、そして社会貢献」に意を用いること。つまり、「三方良し」の商人道の間を忘れずに、信頼関係の構築を何より大事とした畜産経営を行いたいとしているが、この金子氏の経営理念は、次の時代を見つめる後継者に確実に引き継がれようとしており、今後とも同社の持続的発展が大いに期待される。

(青森県審査委員会委員長 松井 透)

発表事例の内容

1 地域の概況

七戸町は、青森県の東部に位置し、東は東北町(旧上北町)、西は青森市、南は十和田市、北は東北町にそれぞれ接する内陸部の町となっている。平成17年に旧七戸町と旧天間林村が合併し現在に至る。

交通は、国道4号が南北に縦断、国道394号が国道4号と交差して東西に横断しており、また、みちのく有料道路で青森市と結ばれているほか、主要地方道や県道が放射線状に近隣町村に延び、広域交通条件に恵まれた地域である。



さらに、町のほぼ中央に東北新幹線の新駅設置や東部には一般国道45号三沢～天間林間の整備が予定されるなど交通の要衝地域となり、地理的条件から一体的な県土整備の要となっている。

町の主産業は農業で、産出額では、トップはながいも、にんにく等の根菜類が主体の野菜類(27.3億円)が首位、次いで水稲(17.6億円)、畜産(15.8億円)と続き、合計63.6億円となっている。

畜産業をみると、平成13年度のBSEや近年の飼料価格高騰が影響し、飼養戸数、頭数とも減少傾向にあったが、ここ数年は安定している。

主要家畜飼養戸数・頭数

年度	乳用牛				肉用牛			豚		
	飼養戸数	飼養頭数			飼養戸数	総頭数	繁殖	飼養戸数	総頭数	繁殖
		総頭数	2歳以上	2歳未満						
平成7	11	171	135	36	136	4,657	457	19	5,478	600
平成12	7	146	106	40	106	5,055	428	13	5,775	553
平成20	4	158	114	44	101	8,919	616	11	5,073	426
平成21	3	157	120	37	102	8,850	636	11	4,244	439

2 経営・生産の内容

1) 労働力の構成 (平成 21 年 7 月現在)

区分	経営主との続柄	年齢	農業従事日数 (日)		部門または作業担当	備考
				うち畜産部門		
構成員	本人	58	300	300	繁殖・肥育牛管理	経営総括
	妻	57	300	300	〃	経営総括補助
	長男	32	300	300	〃	飼養管理全般
	長男の妻	29	300	300	〃	事務管理全般
従業員	常時雇用	20代	300	300	〃	5人
		30代	300	300	〃	5人
		40代	300	300	〃	5人
		50代～	300	300	〃	5人

2) 収入等の状況

(1) 部門構成 (平成 21 年 9 月末)

部門	種類	飼養頭数		経営上の特記事項
畜産	肥育	乳用種	6,750	
		交雑種	1,500	
		黒毛和種	16	
		短角和種	110	
	繁殖	黒毛和種	4	
		短角和種	50	
	計			

(2) 部門別の収入内容 (平成 19 年 12 月～20 年 11 月)

部門	種類	販売量	売上金額	経営上の特記事項
畜産	肥育牛売上	6,218	2,400,254,921	
	たい肥売上		10,018,338	
	計		2,410,273,259	

3) 土地所有と利用状況

(単位 : ha)

区分		実面積		備考
		うち借地	うち畜産利用地面積	
耕地	40ha			転作田、飼料畑
牧草地	55ha			放牧地、採草地
山林	10ha			

4) 自給飼料の生産と利用状況（平成19年12月～20年11月）

使用 区分	飼料の 作付体系	面積 (ha)		所有 区分	総収量 (t)	主な利用形態等 (採草の場合)
		実面積	延べ面積			
採 草	オーチャード、 チモシー	50	50	自家	1.1	ロール
	デントコーン	26	26	自家	3.9	ロール、サイレージ

5) 経営の実績・技術等の概要

(1) 経営実績 (平成19年12月～20年11月)

経営の概要	労働力員数		家族	4.0	人	
	(畜産部門・2000時間換算)		雇用	20.0	人	
	飼料生産用地延べ面積			17,600	a	
	稲ワラ回収			12,000	a	
	肥育牛平均飼養頭数	肉用種		160	頭	
		交雑種		1,500	頭	
		乳用種		6,750	頭	
	年間肥育牛販売頭数	肉用種			頭	
		交雑種		802	頭	
		乳用種		5,416	頭	
収益性	年間総所得			54,938,601	円	
	肥育牛1頭当たり年間所得			6,533	円	
	所得率			2.3	%	
	肥育牛1頭当たり	部門収入		286,596	円	
		うち肥育牛販売収入		285,405	円	
		売上原価		307,392	円	
		うち素畜費		110,830	円	
		うち購入飼料費		155,662	円	
うち労働費		6,889	円			
うち減価償却費		7,712	円			
生産性	肥育(品種・肥育タイプ)	肥育開始時	日齢	210	日	
			体重	300	kg	
		肥育牛1頭当たり	出荷時日齢	570	日	
			出荷時生体重	800	kg	
	(乳用種去勢若齢)	平均肥育日数			365	日
		販売肥育牛1頭1日当たり増体重(DG)			1.39	kg
		対仕向事故率			1.0	%
		販売肉牛1頭当たり販売価格			345,000	円
		販売肉牛生体1kg当たり販売価格			431	円
		枝肉1kg当たり販売価格(税ぬき)			750	円
		肉質等級3以上格付率			16.0	%
		素牛1頭当たり導入価格			99,000	円
		素牛生体1kg当たり導入価格			330	円
肉牛出荷1頭当たり差引生産原価			414,144	円		
肥育牛1頭当たり投下労働時間			5.7	時間		

(2) 技術等の概要

地帯区分		平地農業地域
飼養品種		乳用種、交雑種
後継者の確保状況		有 昭和26年
飼養・搾乳	飼養方式	
飼 料	自家配合の実施	有
	TMRの実施	無
	食品副産物の利用	無
繁殖・育成	ETの活用生産の実施	無
	F ₁ 生産の実施	無
	カーフハッチの飼養	無
	経産牛の自家配合割合	無
販 売	加工・販売部門の有無	有 オリジナル商品(カレー、ジャーキー、ハチミツなど)
	地産地消の取り組み	有 地元スーパーや道の駅への出荷
そ の 他	肥育部門の実施	有
	協業・共同作業実施	無
	施設・機器等共同利用	無
	ヘルパーの活用	無
	コントラクターの活用	無
	公共育成牧場の利用	有

6) 主な施設・機械の保有状況

機械・施設名		数 量	備 考
施 設	畜舎	29	直営牧場のみ
	たい肥舎	4	直営牧場のみ
機 械			

7) 家畜排せつ物の処理・利用状況

(1) 処理の内容

処理方式	混合処理
処理方法	縦型オーガ式強制発酵施設（2棟）で発酵 縦型密閉コンポで発酵
敷 料	イナワラ、モミガラ、オガクズ、戻したい肥、(微生物資材)

(2) 利用の内容

内容	割合 (%)	用途・利用先等	条件等	備考
販売	60%	主に畑作農家	1,500～2,500 円/t	配送運賃込み
交換	10%	主に稲作農家	なし	
無償譲渡	0%			
自家利用	30%	飼料畑、ナタネ畑		

3 経営の歩み

1) 経営・活動の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和 46 年	畜産	3 頭		肉用牛肥育経営を開始
〃 47 年	〃	200 頭		乳用種去勢牛を中心に増頭
〃 49 年	〃	0 頭		第 1 次オイルショックのあおりを受け、全頭処分。運輸会社へ勤務するが、同年に乳用種素牛生産を再開し、会社勤務と兼業を始める。
〃 50 年	〃			農場を移転する。牛舎建設。専業を再開し主に素牛生産に着手する。
〃 53 年	〃			一貫肥育経営を再開
平成 5 年	〃	1500 頭		見町牧場設立。飼養頭数 1500 頭。
〃 10 年	〃	2300 頭		他農場への預託を開始。飼養頭数 2300 頭。
〃 13 年	〃			長男就農
〃 14 年	〃	4000 頭		飼養頭数 4000 頭
〃 15 年	たい肥生産			縦型オーガ式強制発酵施設設置
〃 16 年	たい肥生産			縦型オーガ式強制発酵施設設置
〃 17 年	畜産			切田牧場設立。加工品製造開始。
〃 18 年	たい肥生産 ふれあい牧場			縦型密閉コンポスト導入 旧盛田牧場に「金子ファーム」設立。「ハッピーファーム」と名づけふれあい牧場を整備
〃 19 年	飼料生産 畜産	130 頭	35ha	たい肥を利用したデントコーン栽培に着手。日本短角種の飼育開始
〃 20 年	ナタネ生産		7ha	たい肥を利用したナタネ栽培に着手。オリジナル商品（ナタネ油、ハチミツ）の販売。次男就農
〃 21 年	畜産	8300 頭		飼養頭数 8300 頭。直営農場 5 農場、預託農場 7 農場を抱える大規模経営。資源循環型畜産を目指した取り組みを行っている。

2) 過去5年間の生産活動の推移

	平成16年	平成17年	平成18年	平成19年	平成20年
畜産部門労働力員数(人)	24	24	24	24	24
飼養頭数(頭)	4,493	5,258	6,018	6,043	6,396
販売・出荷量等(頭)	4,170	5,026	5,835	5,804	6,218
畜産部門の総売上高(千円)	1,651,336	2,023,630	2,421,036	2,245,018	2,410,273
主産物の売上高(千円)	1,651,336	2,023,630	2,421,036	2,245,018	2,410,273

4 経営・生産活動の内容

1) 総括

青森県の畜産地帯である七戸町で、約130haの広大な用地を有する(有)金子ファームは(代表:金子春雄氏、58歳)、八甲田山を望む雄大な自然環境の中、ホルタイン種、交雑種、日本短角種を約8300頭飼養し、県下の大規模生産農場である。そして、創業以来、「ただ利益をあげるのが目的でなく、消費者に安全・安心な牛肉を提供する」という基本理念の下、「安全・安心へのこだわり」「環境保全への配慮」「資源循環型畜産への挑戦」「地域社会との協調・融和」を社是として、安全・安心にこだわった国産牛肉の生産を続けている。

その後、第1次オイルショックやBSEなど幾多の困難を克服し、徐々に頭数と用地を拡大し現在に至っている。

また、牛づくりだけでなく、無償で農業の持つ多面的機能の重要性と生命の尊さを学習させる場を設けているほか、文化財の保全にも取り組んでおり、地域社会に密着した農業経営を実践し、その貢献度は大きくほかの模範となっている。



2) 安全・安心へのこだわり

金子ファームの看板は、ホルスタイン種のオリジナルブランド「健・育・牛」である。「健康ですくすく育つこと＝安全・安心につながる」をコンセプトに、北海道の契約農場から健康な素牛(生後6～7ヵ月)を導入し、その後、金子ファームのオリジナルで、抗生物質を一切使用しない配合飼料と自家産のデントコーン、県産稲わらなどの粗飼料で肥育し、安全・安心でおいしい国産牛肉に仕上げている。

「健・育・牛」は、大手メーカーと取引しており、味・品質・安全性が認知され更なる増頭要請がある。

また、精肉として青森県内の生協でも販売され好評を博している。また、最近ではビーフジャーキーや



レトルトカレーなど加工品製造にも取り組んでおり、商品は地元の道の駅「しちのへ」などで販売しているほか、ネットでの販売も行っている。

3) 環境保全への配慮

「自社の発展は地元住民の理解と協力なくしてはありえない」との理念から、これまで最新のふん尿処理施設を積極的に設置するなど、環境保全に取り組んでいる。

生産した完熟たい肥は、(社)青森県畜産協会が主催する青森堆きゅう肥品評会で優秀賞を受賞するなど、品質の高さが認められている、また、運搬も行っていることから県内各地域の野菜農家や果樹農家から注文が殺到しており、需要を賄いきれない状態である。特に日本一の生産量を誇るリンゴやニンニク農家からの引き合いが強く、青森県が進めている「日本一健康な土づくり運動」にも大いに貢献している。

4) 資源循環型畜産への挑戦

平成18年に、同じ町内の競走馬生産牧場の用地を購入したことをきっかけに、これまでの環境保全活動をさらに進展させた資源循環型畜産の確立に挑戦している。

具体的には、競走馬牧場跡地に自家生産したたい肥を投入し、デントコーン栽培に着手。収穫後はラップサイレージとして「健・育・牛」に給与するリサイクルの流れを確立した。

さらに、平成20年からは、同じ牧場跡地の約7haで、牛ふんたい肥のみの無農薬で資源作物である菜の花の栽培を開始。かつての美しい文化景観を再現したほか、油を搾って商品化(商品名「牧場のなたね油」)したり、菜の花だけのハチミツを生産。さらに、油の搾りかすは、牛の飼料にするなど、牛→土→作物(デントコーン、菜の花)→牛といった徹底した資源循環型の畜産を構築している。

今後は、なたね油廃油や加工業者の廃食油を回収し、燃料化したBDFを作り、農耕用機械に活用するなどバイオマス資源の利活用を通じた環境にやさしい更なる資源循環型畜産の構築に挑戦していくとしている。

5) 日本短角種の生産

安全・安心へのこだわりと資源循環型畜産への挑戦の延長線上の取り組みとして、平成19年から、北東北特産の日本短角種の飼育を始めた。日本短角種の頭数が減少する中で、現在の飼養頭数は160頭と、個人では県内最大の生産者となっている。



金子ファームでは、「日本短角種は、粗飼料の利用性が高く、粗食に耐え、放牧しながらでも肥育可能。飼料高騰など、厳しい経営環境の中で、特に魅力を感じる」として、今後も増頭していく考えである。

5 今後の目指す方向性と課題

金子氏は、近隣村からの移住者であり、大規模畜産経営を安定的に存続していくためには地域住民との協調・融和が何より大事と考え、環境対策には特段の配慮を講じており、適切なふん尿処理と良質なたい肥生産および供給を心がけ、地域農業と有機的に結びついてきたことは、前述の通りである。また、資源循環型畜産への挑戦の中で、菜の花栽培による美しい文化景観を再現し、地域住民に牧歌的な潤いを提供していることや牛肉加工品の産直販売活動を実施していることも前述の通りである。

加えて、県の営農大学校の生徒を研修生として受け入れるなど後継者の育成に尽力している。また、金子氏は、(社)青森県配合飼料価格安定基金協会の副会長の要職にあり、多忙の折、基金加入率の向上や会員間の相互融和に努め、飼料価格高騰の渦中にある多難な協会の円滑な運営に奔走している。

さらに、平成18年からは、前述の競走馬生産牧場の用地を購入したことから、本牧場を「ハッピーファーム」と名付け、ミニチュアホースやめん羊、軽種馬などを飼育して、「ふれあい牧場」を開設している。そして、自ら周辺環境とマッチした公衆トイレを設置し、町民に憩いの場を提供しているほか、小・中学校の総合学習での社会見学の場の提供や消費者交流を通じて、農業の持つ多面的機能の重要性と生命の尊さを学習させるなど、畜産への理解を深める活動にも力を入れている。

また本牧場内には、現存する最古のきゅう舎とされている南部曲がり家や神社など歴史的に価値のある建造物が8カ所あり、登録文化財に指定されている。これら文化財を自費で管理しているほか、毎年近隣住民を招いて神社の例大祭を実施するなど信心深く、多くの自費を投じて地域農業や地域社会との協調・融和に積極的に取り組んでいる。



ふれあい動物の設置



歴史的有形文化財の保存



公衆トイレの設置



美しい文化景観を再現

6 今後の目指す方向性と課題

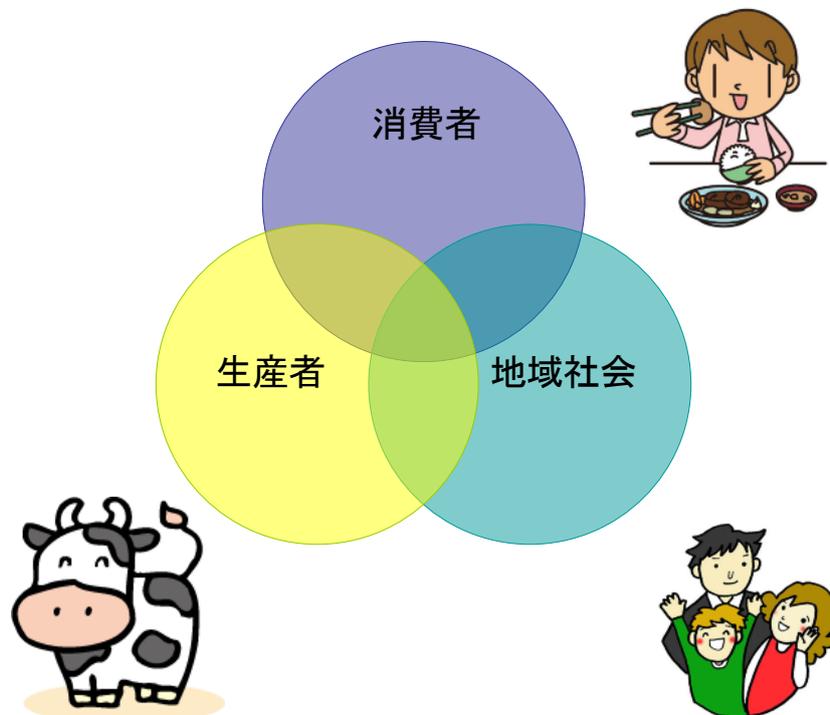
方向として、今後とも「安全」「安心」で「高品質」な牛肉生産を目指して、職員一同が「青森ねぶた」のごとく燃えるような情熱と真心を傾けて一生懸命に努力していきたい。そして、人間が生きていくうえで大事な食料生産をしているのだから、生産効率より安全性を優先して生産していきたい。もうければ良いというものではない。そのためにも、消費者への情報提供に努め、生産内容はガラス張りとしていく方針である。

町民の憩いの場として整備した「ハッピーファーム」と歴史的建造物をしっかりと管理しながら、地域の伝統文化をしっかりと継承していく。地域社会の中で生かされていることを十分に認識しながら協調と融和に励んでいきたい。

課題として、飼料高騰や経済不況による牛肉卸売価格の低下など外部に起因する不安がある。しかし、これら大きな外部要因の克服は自分たちではどうしようもないが、自分たちのできる努力を1つ1つ確実に実施していくしかない。これまで通り地に足のついた「知足安分」の経営方針を貫きたい。

結びに、農業者ではあるものの、消費者、自分たち生産者、そして社会貢献に意を用いた「三方良し」の商人道の精神を忘れずに、信頼関係の構築を何より大事とした畜産経営を行いたいとしている。

「三方良し」の精神



【写真】



安心・安全にこだわったオリジナルブランド「健・育・牛」



良質たい肥は地元の耕種農家から注文が多い



たい肥を利用した無農薬の菜の花栽培



オリジナル商品のビーフジャーキー



エサにも安全性を求め、自給飼料生産にも取り組む



ふれあい牧場「ハッピーファーム」には地元の子どもたちが遊びにくる



地域との融和を大切にし、地域文化財の保存に取り組む



粗飼料の利用性が高い日本短角種を飼養する